

東京大空襲を考える

—その政治的影響を中心に—

報告者 **鈴木多聞**

法政大学国際日本学研究所客員学術研究員
法政大学兼任講師・東京大学非常勤講師

略歴:1975年生まれ 博士(文学)

2005年東京大学大学院人文社会系研究科博士課程単位取得退学
日本学術振興会特別研究員、京都大学特定准教授などを経て、現職。

司会 **小口雅史**

法政大学国際日本学研究所長
文学部教授

1945年3月10日未明の東京大空襲によって下町は焼け野原になりました。夜が明けてから、隅田川にかかる言問橋を渡った人の中には「烏賊を焼いた時のようにピンク色に反りかえって」いた遺体や、乳母車の残骸の側で母親が子供を抱いたまま倒れているのを見た人もいます(『語りつごう平和への願い 東京大空襲墨田体験記録集』)。日暮れ頃、千葉街道を車で通過した東久邇宮盛厚王は「マツの根っ子」のような遺体を見て衝撃を受けます(『昭和史の天皇』)。

本報告では、東京大空襲が、当時の様々な政治勢力や人々に、どのように考えられ、それが「戦後」にどうつながっていったのかを、日米双方の視点から考えることとします。

2019年**12月4日**(水)

17時~19時

(入場無料、事前予約不要)

会場

法政大学市ヶ谷キャンパス
ポアソナードタワー25階 B会議室
(東京都千代田区富士見2-17-1)

□お問い合わせ

法政大学国際日本学研究所事務室

E-mail: nihon@hosei.ac.jp

電話: 03-3264-9682

□詳細情報

<https://hijas.hosei.ac.jp/>



主催 法政大学国際日本学研究所
共催 法政大学江戸東京研究センター



江戸東京研究センター
Hosei University Research Center for
Edo-Tokyo Studies



法政大学